



尾道市医師会保健文化賞受賞記念市民公開講座 『安心を地域で支える尾道方式、さらなる進化に向けて』

尾道市医師会広報担当理事 日下 治



このたび尾道市医師会は第59回『保健文化賞』を受賞した。「在宅医療を推進するとともに開業医と急性期病院の連携を図り、社会福祉協議会や民生委員などと協働して、医療と介護を包括的に提供する体制整備に大きく貢献した」という業績により受賞が決定したようである。これまでわれわれが実践してきた多職種協働の尾道方式が評価されたもので、推挙いただいた広島県医師会に心より感謝申し上げる。

この賞は、昭和24年に第一生命が、公衆衛生の向上のために、保健衛生の分野で实际的な活動や研究を行い優れた業績をあげた団体や個人に、感謝と敬意を表するために創設したもので、厚生労働省ならびに朝日新聞厚生文化事業団、NHK厚生文化事業団の後援を受けて続けられており、非常に格式の高い賞と聞いている。9月25日(火)ホテルオークラにて贈呈式が執り行われ、翌日は、皇居に参内して天皇皇后両陛下の拝謁を賜った。

これを記念し、去る11月1日(木)午後6時30分より、尾道駅前のテアトロシェルネ(しまなみ交流館)大ホールにおいて記念市民公開講座を

開催した。市民約400名が参加し、来賓として、厚生労働省から香取照幸参事官、広島県医師会からは碓井静照会長をはじめ黒瀬康平、高杉敬



久岡副会長、さらに広島県東部地区医師会の寺岡暉顧問など大勢の方にご臨席いただいた。

まず、片山壽会長が開会の挨拶に立ち、「保健文化賞という大変栄誉ある賞を受賞したことを機会に、市民に尾道方式というものをきちんと説明するために市民公開講座を開催した。今後の安心を支える尾道方式は、ぜひ市民の皆さまの参加を得て動かして行きたい」と述べた。

続いて、来賓挨拶に移り、最初に第一生命保険相互会社広島総合支社の小松辰昭支社長が、「私ども第一生命が主催する保健文化賞は、保健衛生分野の表彰では今日最も栄誉ある賞として高い評価をいただいている。この度は全国から62件の応募があり、厳正な審査の結果、10団体と個人6名が受賞された。その中でも、尾道市医師会は全国に先駆けて在宅医療において病診連携を図り、医療、介護の包括的ケアを推進したことにより受賞されたことは、誠にご同慶の至りだ」と祝辞を述べた。

次いで、介護保険の制度設計を担い、尾道ではすっかり馴染みの厚生労働省、香取照幸参事官は「今回の尾道市医師会の受賞は、私ども厚生労働省の立場からすると、これまで受賞した他の団体と違って3つの大きな意義がある。1点目は、尾道市医師会の先進的な取り組みが国の保健医療行政や高齢者介護行政に非常に大きな影響を与えて来たことで、特に介護保険制度においては数多くの厚生労働省の人間が尾道を訪ねて沢山のことを学んで帰り、政策に反映させている。2点目は、地域包括ケアとか多職種連携などは今では当たり前の言葉であるが、これを理念ではなく実践することにより、同じような取り組みをする日本中の多くの地域の道標となった。3点目は、尾道市医師会の取り組みは常に進化しているということで、医療と地域福祉との連携、あるいは在宅医療の推進から緩和ケア・終末期への取り組みなど、制度や時代の常に先を進んでいる」と絶賛していただいた。

次に、保健文化賞に尾道市医師会を推挙いただいた広島県医師会からは、日本医師会の会合で上京中の碓井静照会長の挨拶文を黒瀬康平副会長が代読した。「尾道では、主治医機能を軸に医療、介護を一体的に提供するケアマネジメントシステムが確立されており、現在ではさらに社会福祉協議会、民生委員などとも連携して新地域ケアの構築へと発展し、全国的にも注目を集めている。この尾道方式が、高齢者のために最適な医療介護を提供したいという熱い思いから生まれたように、後期高齢者医療をはじめと

する医療制度改革も財政至上主義ではなく、真に国民の医療はどうあるべきかという理念の上に立って行って欲しい」とメッセージを伝えた。

続いて、保健文化賞授賞式の模様がDVDで流された後、講演会に移った。座長を広島県東部地区医師会の寺岡暉顧問、コメンテーターを厚生労働省の香取照幸参事官にお願いして、片山壽会長が『安心を地域で支える尾道方式ができるまで』と題して講演した。冒頭で保健文化賞受賞の様子を報告し、皇居で天皇皇后両陛下に拝謁した際、「国の手本として体に気をつけて頑張ってください」と励まされ、感動し新たなミッションを授かったと述べた。厚生労働省からの感謝状を示して、今回の受賞は、地域医療連携と新地域ケアの両方が評価されたものであると前置きし、「1990年に救急蘇生委員会を立ち上げ、3急性期病院とともに消防、警察などの関連機関と連携して救急救命システム構築したのが、今の尾道方式の始まりである」と述べた。

次に、「今、国民の医療福祉に関する不安が増大している。主治医とケアマネジャーの連携がないために適切で継続的な医療介護を受けることのできない、いわゆる連携難民がたくさん発生している。世界一の高齢者国家で世界中が見守っている中で、国は社会保障費を抑制することしか考えておらず、高齢者に負担を強いることによりさらに難民を増加させている。尾道においては、こういった難民を出さないために新地域ケアを構築して来た。まず、一馬力の開業医が最大限の機能を発揮できるように、程よくシステム化された医療サービス体制の整備が必要で、他職種を含めた系統的な研修や講演会を開き、共通認識を醸成し人材育成に努めて来た。救急蘇生委員会の手法をベースに連携型医療を推進し、多様な高齢者のニーズに対しケアカンファレンスを活用して、多職種協働、急性期病院とのミッションの共有、さらに地域福祉との連携もできた。その後は、地域医療連携システムを土台にして、1995年の訪問看護ステーションを皮切りに、介護老人保健施設(含在宅介護支援センター)、24時間対応型ヘルパーステーション、さらにはシステム理論を研修するためのケアマネジメントセンターを開設し、介護保険が始まる前に、高齢者医療介護に必要なシステムの基盤整備を終えた。さらに、ケアカンファレンス、多職種協働の実践、在宅医療の進化により開業医中心の地域連携チーム

が育ってきた。こうして医療と介護の一体的な動きが可能となってきたため、2002年には社会福祉協議会と、2004年には連合民生委員児童委員協議会と、2006年には公衆衛生推進協議会との連携を行い、ここに安心を地域で支える尾道方式が始まった。これは、難病、重度障害、認知症、末期癌などあらゆる障害疾病があっても、尾道では最後まで自分らしく尊厳を失わず暮せるように、主治医と病院の医師が機能分担した医療連携をベースに多職種協働の新地域ケアで臨んでいる。医療と介護はケアマネジメントで繋がり、共通認識を持って一人一人に合ったケアプランにより医療、介護を手順よく投入して行くわけである。今後、子育て支援などにも尾道方式を適用し、小児科、産婦人科が主体になり地域の民生児童委員、行政などと協働して子育てに不安のある母親を支援して行きたい」と述べた。

座長の寺岡暉先生が、「尾道方式はマスコミにもたびたび登場し、派手な印象を受けるかもしれないが、医師会と地域が15年に及ぶ地道な努力を積み重ねて来た結果が今日の成果に結びついたのだと思う」と述べると、これを受けて、コメンテーターの香取照幸参事官が、「尾道の高齢化率は約30%と全国平均の20%を大きく上回っているが、尾道は全国の10年先を走っており、10年後に日本全体で尾道方式のシステムを作っていれば老後は安心して地域で暮らしていける。この尾道方式のシステムを作った医師会、それを支え実践している地域の皆さんの努力と継続する意志に敬意を表する」と締めくくり、講演会を終了した。

続いて、これまで尾道方式を支えてきた、尾道市社会福祉協議会の富島正路会長、尾道市連合民生委員児童委員協議会の古川巖会長、尾道

市公衆衛生推進協議会の高橋敏行会長に片山壽会長より感謝状が贈呈された。富島正路会長が「今後とも3者が一緒になって医師会の指導のもとに、高齢者のため尾道のために頑張っていきたい」謝辞を述べた後、片山会長をはじめ4名全員が壇上の前方に並んで改めて一礼すると、聴衆からはスタンディングオベーションで大きな拍手が湧き上がった。

ここで、急きょ東京より駆けつけて下さった、広島県医師会の碓井静照会長が壇上に上がり、「今、大変感動的なシーンを見させていただいた。映画『シッコ』のようにアメリカの医療はすでに崩壊しているが、日本の医療も同じ道をたどろうとしている。お金がない人、病気の人、障害のある人が不利になってはいけないというのがわれわれ医療者の願いである。この問題に地域ぐるみで取り組んでいるのが尾道方式であり、これからも尾道市医師会が日本の医療、介護のリーダーとして頑張りたい」とエールを送って下さった。

最後に、JA尾道総合病院の黒田義則病院長が、「表彰状に『開業医と急性期病院との連携』という言葉があり、急性期病院の一人として非常に嬉しかった。本日お越しの皆さまには、こういうふうに尾道市医師会は15万人の健康を一生守ってくれているのだということを地域に浸透させていただきたい。そして、この尾道方式が全国に広がって行くことを心から願っている」と、閉会の挨拶を述べ、市民公開講座は無事終了した。

ロビーに展示された、尾道方式を支えているさまざまなプロジェクトや地域での取り組みに関するパネルも好評で、保健文化賞受賞記念の市民公開講座としては、成功裡に終了することができた。

